正面から向き合ってきた２つの大きな県政課題

九州新幹線西九州ルート

■ 進まなかった協議

九州新幹線西九州ルートは、博多～長崎間を結ぶ計画です。武雄温泉～長崎間は令和４年９月に開業しましたが、新鳥栖～武雄温泉間は未整備で、現在は武雄温泉駅で新幹線と在来線特急を乗り換える「対面乗換方式」が続いています。当初は、線路幅の異なる新幹線と在来線を直通できるフリーゲージトレイン(FGT)の導入を前提としていましたが、国が開発を断念。その後、国はフル規格による整備を求めていますが、佐賀県は巨額の財政負担や在来線への影響などを理由に慎重な姿勢を続けてきました。

■ 議論は新たな段階へ

今年７月、ようやく佐賀県は、特定のルートを前提とせずに環境アセスメントに向けた調査を行うことで国交省と合意。長年停滞してきた議論は、新たな段階に入りました。今後は、「どこを通るのか」「県負担をどうするのか」「在来線をどうするのか」など、具体的な議論が必要になります。そして鳥栖にとって極めて重要なのが、新鳥栖駅の位置付けです。新鳥栖駅が西九州ルートと鹿児島ルートを結ぶ「分岐駅」となることは、鳥栖のみならず佐賀県全体の将来にとって重要な問題だと思っています。

■ 分岐駅は新鳥栖駅なのか？

一般質問　（R8 年９月定例会　抜粋・要約）

中村：新鳥栖駅での分岐は、鳥栖市長と鳥栖市議会がともに公式の場で示している「鳥栖市の意思」である。県として、新鳥栖駅を分岐駅とすることを前提に、今後の環境アセスや国との協議に臨むのか？

知事：今後、技術検討会において技術的な課題が検討、検証されていく。

中村：「新鳥栖駅が分岐駅」とは明言されなかった。これは単に新幹線をどこで分岐させるかという問題ではない。知事が鳥栖市をどう位置付け、その将来をどう考えているのかという問いでもある。鳥栖市民に向けてご答弁を。

知事：鳥栖が交通の要衝として成長してきたことへの誇りはよく理解している。市長をはじめ分岐に対する思いも受け止めている。中村議員の意見も受け止めながら進めていきたい。



開業当日の朝、武雄温泉駅に入ってくる新幹線

佐賀県立大学（仮称）

■ 着々と進む計画

佐賀県は、令和 11 年（2029 年）４月の県立大学開学を目指しています。1 学年 250 人規模の経営情報学部。地域や企業などの実際の課題に取り組む PBL（課題解決型学習）などを通じて、社会に変化を生み出す「チェンジメーカー」の育成を掲げています。９月定例会では、大学建設に関係する約 146 億円の予算案が提出されました。私の属する自民党会派は、予算案を知事選挙後に提出するよう求めて反対しましたが、採決の結果、予算案は原案どおり可決されました。

■ 知事選挙の争点に

県立大学の行方は、12 月の知事選挙の結果に大きく左右されることになります。現職知事が再選されれば、現在の計画に沿って整備が進められることになります。一方、県立大学の見直しを公言している新人候補が当選すれば、一度立ち止まり、計画そのものが改めて検討されることになります。私は、これほど大きな事業だからこそ、知事自身が県立大学を改めて公約に掲げ、県民に訴え、選挙で信任を得た上で堂々と進めるべきだったと考えています。

■ なぜ知事選挙を待てないのか？

一般質問　（R8 年９月定例会一般質問　抜粋・要約）

中村：選挙に絶対はない。選挙結果によって建設を凍結、あるいは中止することになれば、多くの関係者に迷惑をかけることになる。今できる準備を進め、選挙で信任を得たならば、速やかに臨時議会も含めて必要な手続きを進め、令和11年４月の開学に向けて最大限努力する。それが知事として、そして議会としての責任ある進め方ではないか。手続論ではなく、知事の県民への向き合い方を問うている。私に対してではなく、県民に向けてご答弁を。

知事：もちろん、選挙があることは十分承知している。この県立大学が佐賀県にとって、とても大切であるからこそ、しっかりと準備行為をしながら、まっすぐにその道を進めていきたいと思っている。



佐賀県立大学（仮称）の完成イメージ図



佐賀県議会議員

号外（令和８年９月）

なかむら　けいいち
中村圭一

活動報告

政治家としての矜持



不易流行。時代や状況が変わっても変えてはならないものを大切にしながら、時代の変化に応じて、新しいものも柔軟に取り入れていく、という意味の言葉です。政治の世界でいう「保守」とは、まさに不易流行であるべきだと、私は思っています。県執行部への質問も、国への意見書提出も、常にその信念をもとに行ってきました。

また、佐賀県に限ったことではありませんが、首長が提案する議案のほとんどは可決されます。しかし「これはちょっとどうなのか？」という議案が時にはあります。そのような時に、「首長が提案しているのだから・・・」と忖度して可決するのではなく、「おかしいものはおかしい」と否決（修正）することが、地方議会（特に最大会派）に属する者の使命だと思っています。知事の提案を否決することは、大げさに言うと佐賀県の歴史を変えることです。その重みを十分に認識した上で、決断すべき時には決断することが、議員の一番の仕事だと思っています。

２期目の残された任期も、保守としての矜持、そして地方議員としての矜持をもって、県執行部と向き合って参ります。

ご意見ご要望は

携帯 090-2522-3944

鳥栖の元気が、佐賀の元気！

現場で聞く。議会で問う。県政を動かす。

これまでの活動を6つの視点から。

鳥栖を元気に。暮らしを豊かに。

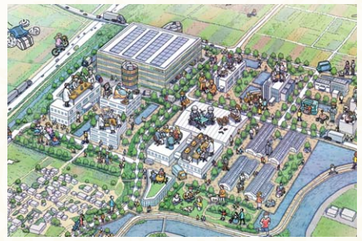
九州の心臓部である鳥栖が元気になって、その元気を県全体へと広げる。地の利に恵まれた鳥栖にはその責任がある。そんな気概をもってこれまで活動。



山浦ＰＡのスマートＩＣ化と新鳥栖駅周辺の開発について質問。将来は九州中から人・物・情報が集まるエリアに。



R11 年１月に操業開始予定のアサヒビール鳥栖工場。不安の解消と期待の実現は、地元の議員の役目。



小郡鳥栖南スマートＩＣの北側 34ha の開発が進行中。製造業や情報通信業などの誘致で税収増や雇用創出も。

これらの開発などによって生み出される鳥栖の元気を、鳥栖に住むすべての皆さまの笑顔と安らぎにつなげていくために、市長、市議会議員、国会議員とスクラムを組んで。

現場で聞く。議会で問うために。

市内各地域で県政報告会を開催。時間は約１時間。40 分間ほどの報告の後はご意見やご要望を拝聴。ここで頂いたご意見とアンケート結果が、議員としての活動の原動力に。



地域での県政報告会はこれまで計９回。ご参加くださった皆様と、毎回手伝ってくれるスタッフに心から感謝。



４年に１回は市全体を対象に広い会場で。次回は11月３日の10時からサンメッセ鳥栖にて。



「女性の集い」も開催。皆さんと楽しく交流させて頂くとともに、貴重なご意見も拝聴。

毎回ご協力頂くアンケート調査では、西九州新幹線の全線フル規格化には約 80％が賛成。県立大学の創設には、賛成と反対がともに約 40％。大学の具体像が見えてくるにつれ反対が増加。

災害に強い鳥栖に。命と財産を守る。

R 元年、R3 年と大きな豪雨被害に見舞われた佐賀県。山の頂上から河川の水門まで、全体での治水対策（流域治水）に、国、県、市が連携して取り組むことが重要。県議はそのパイプ役。



パネルを示しながら鳥栖市の冠水対策などについて質問。



豪雨の際に川のようになってしまう生活道路。



豪雨被害の現場を確認し、早急な復旧を県に要望。

九州各地へのアクセス性に優れた鳥栖市こそ、九州の災害支援の拠点になるべき。そのためにも鳥栖を災害に強いまちに。

議会で問う。県政を動かすために。

皆さんから頂く声。小さいけれども切実な声もある。様々な声に真摯に耳を傾け、どこに、どういう形で届けるべきか。いつもそのことに腐心しながら活動。



佐賀県内に就職すれば返済免除の奨学金制度を！その声を様々な形で届け、ようやく県と企業による奨学金返済支援事業がスタート。



小中学校の道徳の副教材の内容が偏っている！その声をもとに本会議場でパネルを使って問題点をひとつひとつ指摘。副教材は大幅に修正されることに。



記憶に新しい県警察の DNA 型鑑定の不正問題。総務常任委員会で科捜研を視察。県民の声が議会の意見書になり、県警察は第３者による調査を受けることに。

頂いた声によって佐賀県が、鳥栖市が良くなる。ほんの小さな変化でも、安心して頂いたり、喜んで頂いたり。この仕事をしていてよかったと思える瞬間。これからも、真摯に、ひたむきに。

記憶をつなぐ。平和を次の世代へ。

祖父が戦死した日のちょうど四半世紀後の同じ日に生まれた私。戦没者への感謝の思いと平和の尊さを、次の世代へとつなげていくことが自分の使命だと思って活動。



鳥栖市戦没者追悼式で遺族会会長として式辞。多くのご来賓にもご参列頂いた。小さな子どもの姿も。



毎年お盆とお正月の前には地元にある忠魂碑まわりを清掃。生花もお供え。



沖縄県の平和祈念公園内にある佐賀県出身戦没者の慰霊碑「はがくれの塔」での慰霊祭。

公共の平和祈念資料館がないのは全国で佐賀県だけ。まずは、失われつつある貴重な戦没者の遺品を収集することから始めるよう県に要望。遺族会と一緒に検討することに。

立ち戻る原点。まちづくりの現場。

町の区長、地区まち協の会長なども経験。地域の皆さんと一緒に汗を流し、喜びあい、そして時には悔しさやもどかしさも共有。それが大きな財産であり、常に立ち戻る原点。



地元の文化祭では防犯劇の犯人役。大道具・小道具づくり、夜に集まっての練習、本番でのお客さんの笑い声。かけがえのない思い出。



秋葉町（浮立会）の山車の上で、締込姿で浴びる力水。昭和３年から続く夏の伝統行事を次の世代へ。熱い仲間たちとともに。



ふるさと平田町の「ほんげんぎょう」。祖母や母、そして自分の子ども時代をよく知ってくださっている皆さんと一緒に祈る無病息災。

これからも地域の一員として、皆さんとの絆を大切に、現場から離れない政治で、少しでも恩返しを。